

名古屋時代の安田さん

名古屋大学東洋史研究報告 四十二号 二〇一八年六月発行

東 晋 次

はじめに

名古屋大学文学部東洋史研究室、「学究」と「自由」がその室風といわれるが、その室風を体現して多くの名大東洋史関係者から敬愛されていた安田二郎氏が、二〇一八年一月三〇日に逝去された。

本誌編集部から、安田二郎氏を偲ぶ小特集を企画したいのだが、一文を書いてほしいとの要請があった。安田さんの研究業績を含めて追悼の文を、ということであろう。しかし私は研究分野を異にするし、ここ十年間ほどはある事情で研究を放棄している。その重厚な諸論文をおさらいする時間的余裕もない。そういうことは他の執筆者にお任せして、五〇年

もの間、年下の友人として本当に親身になって教導していただいた大先輩の人柄や思い出を、思いつくままに記すことになんとか責めをふさぐことにした。その点ご諒解を請う。

まず、安田さんの人生の歩みの概略を知り得た限りにおいて以下に示しておきたい。

一九三九（昭和十四）年五月一日岐阜県大垣市に生まれる。一九六二（昭和三十七）年三月に名古屋大学文学部史学科を卒業、一九六九（昭和四十四）年三月に大学院文学研究科東洋史専攻の後期課程を単位取得退学、同年五月に愛知県立大学助手に採用された。翌一九七〇（昭和四十五）年二月、吉川智英子と結婚。一九七二（昭和四十七）年四月には、高知大学教育学部助手として四国に赴き、翌年四月同助

教授に昇任。その後、一九七八（昭和五十三）年四月に東北大学文学部へ助教として配置換えとなり、一九八八（昭和六十三）年二月、教授に昇進した。この間、中国の中世、魏晋南北朝時代史関係の講義・講読・演習を中心に、研究と教育に専念し、教育界・学界そして汎く社会全体に多くの人材を送り出した。

東北大学では、四半世紀に及ぶ在任中、東洋史学講座における研究と教育のみならず、東北大学並びに文学部・文学研究科の管理運営にも尽力し、特に、一九九九（平成十一）年四月から二年間、文学部長ならびに大学院文学研究科長に任じた。また、東北中国学会会長、東北史学会会長、魏晋南北朝史研究会会長、東方学会東北地区委員、東洋史研究会評議員、日本歴史学協会委員などの役職を兼ね、東洋史学のみならず中国学・歴史学界全般にわたって、指導的な役割を果たした。二〇〇三（平成十五）年三月、東北大学を停年で退官。東方学会評議員を勤めながら、名取が丘の自宅にて、晴耕雨読、悠々自適の生活を送っていた。

まことに研究者・教育者としての人生に不足のない活躍をされたと感じ入る。安田さんはその大著『六朝政治史の研

究』（京都大学学術出版会二〇〇三年二月）の「あとがき」で、宇都宮清吉・波多野善大・谷川道雄の三先生の名を挙げ、三先生との出合いが自分の一生を決定づけることとなった、と述べている。つまり名古屋大学東洋史研究室での先生方による薫陶、六朝史研究への誘い、研究というものの怖さの自覚と苦悶、そして『宋書』を読み進むうちに「突然に閃光が走り、それまでバラバラに刻み込まれていた事柄が相互に繋がった」修士論文作成時の体験などが、その後の安田さんの六朝史研究者としての生の根底にあることは言うまでもない。「真理を探究しているガキ」（宇都宮先生の言葉）の人生となったその出発点における安田さんのあれこれについて、伝聞も含めて思い出しながら、故人を偲びたい。

教養部・文学部で

私は安田さんよりも五歳年下である。当然ながら、教養部が滝子にあり、文学部が名古屋城内にあった時代の安田さんの活動を目撃していたわけではない。私が実際にその警咳に接したのは、東山キャンパスに教養部や文学部が移り、安田さんが修士論文を書き終えようとしていたところで、教養部

最後の学期の四期生といわれていた時期である。それからまもなくして学部に入ったが、安田さんは博士課程に進んでいた。

安田さんは、一九三九（昭和十四）年五月一日、大垣市の生まれ。大垣北高校を経て、名大文学部東洋史研究室の新制の十期、一九六二（昭和三七）年三月の卒業生である。私が先輩たちから聞いた安田さんの教養と学部時代の様子は、なんでも大垣から名古屋まで国鉄東海道線で列車通学していたのだが、ズック靴を履き、坊主頭で精悍な眼に輝きを宿した青年であつたらしい。研究室の写真集に遺されている大学院初期の写真からもその風貌が彷彿とされる。安田さん自身から、当時の意気軒昂な「大志」を冗談めかしながらも直接聞いたことがある。それは、自分の身長と同じくらい積み上げた岩波文庫本を教養部在籍中に読破する、という目標を掲げ、列車通学の時間ももちろんそれに利用していたらしい。そこから同学による「東海道線の秀才」の名も生まれたのであろう。滝子の旧第八高等学校の跡地にあつた教養部では、中国考古学の岡崎敬先生に師事した。ある人から聞いた話では、岡崎先生は、安田さんの将来をずいぶん嘱望していたとのこと。

こうして、教養部では岡崎敬、文学部の東洋史研究室では、宇都宮清吉、波多野善大、谷川道雄、森正夫、久村因、内藤戊申といった中国史研究の錚々たる先生方に指導を仰ぎながら、徐々に中国古代中世史にその研究分野をしぼり込んでいった。卒業論文「謝氏研究」がそのスタートであり、その後の安田さんの基本的な研究分野はこれによって決まっていたのである。

大学院時代

文学部卒業後は大学院に進学した。名大東洋史研究室では研究室開設と共に大学院への道が開かれていたのではなかったようである。スタッフはもちろんそろっていたが、研究室に備えられている書籍や史料では十分な研究がまだまだだという理由であつたと聞いている。その証拠に、宇都宮清吉先生の退官記念文集『三家渡河録』の「あとがき」に波多野善大先生が、「開設当時は、わずかただ一つの書架に、二一史と数十冊の雑本しかなかった書物が、今では数千冊に増加し、この研究室を利用してある程度の研究成果をあげられるまでになった」と書いている。研究室開設は一九四九年四

月、退官記念文集は一九六九年刊行であるから、宇都宮先生は二十年にわたって研究室を主宰されたのだが、この間、先生はご自身の科学研究費で『四部叢刊』正・続・三編を購入したり、先生所有の大量の抜き刷りを研究室に寄贈するなど、その研究環境の充実に力を尽くされたのである。また一九五〇年代後半には次第に中国大陸から比較的安価な史料が入手できるようになったことも、研究室としての機能を高めることとなった。かくして、安田さんの二年先輩の間瀬正英さんと一年だけ先輩で一九六一（昭和三六）年の卒業生である丹羽兌子（旧姓・長）さんのお二人が一九六一年四月の最初の進学者で、そして安田さんという順序である。従って安田さんは三人目の院生であったことになる。

私が宇都宮先生から直接聞いたところでは、一九六一年よりも古い卒業生、旧制の方々の中にも院生になりたい優秀な学生が何人もいたのだが、受け入れられなくて残念であった、というお話であった。実際に、宇都宮先生の退官時のパーティーでお会いした古い卒業生の方が、自分は大学院へ行きたかったけれども、進学が許可されずやむなく高校の教師となった、とおっしゃっていた。また、岡山大学で教鞭を執られた好並隆司先生から、実は名古屋大学の大学院で宇都

宮先生に師事して漢代史研究をやりたかったのですよ、と聞かされたことがある。

そういう向学の志に燃えた方がたくさんおられたが、安田さんももちろんその例外ではない。「あとがき」に大学院進学の事情が述べられている。曰く「南朝の終焉と共に史乗から姿を消す超名族陳郡謝氏の、夏の夜の花火さながらの華麗のはかなさに魅せられ、謝氏一族の中に南朝という一つの時代の特質が凝縮されているというのが、抑々の発想であったが、（卒業研究では）如何せん、実力が伴わず、族的結合と経済状況とをなぞるだけに終わった。この一種の消化不良の感覚と口惜しさことから、大学院進学を決意した。東洋史研究室も前から門戸が開かれていたことが幸いした。間瀬正英、丹羽（長）兌子のお二人が一年上の先輩であった。」ここにもなかなか自分に合格点を与えない、いかげんには妥協しない安田さんの性格がよく表れている。

院生としてさらなる研究の日々を送りながら、中国文学や中国哲学の研究室員との交流も盛んに行った。「中国会」という名の東洋史・中国文学・中国哲学の三研究室の助手と院生が集まって結成したミニ学会があった。特に規約のようなものがあるわけではなく、勉強会を定期的に関き、時には遊

行もかねて遠出をしたり、コンパを催すこともあった。学部生であった私も一度研究会に誘われ、その後のコンパにも参加したことがある。「あとがき」に、中国文学の「岡村繁助手のご配慮で設けられた研究会を通して六朝時代の文章を読むための本格的な手ほどきを受け」たとあるから、この研究会が「中国会」であったかどうかははっきりしないが、中国文学研究室にも六朝時代を専攻する院生の方がおられたから、研究室横断的な交流や研究の機会も多くあっただろう。かかる経験が、おそらく東北大学文学部においても三研究室のスタッフとの交流による自身の研究の深化への絶えざる志向をもたらしたと想像される。

実は私が学部学生だったとき、宇都宮先生から、君たちは東洋史の授業ばかり受けて一生懸命になっているが、入矢義高先生、大濱皓先生など中文や中哲の先生方の講義も、単位はともかく、連続講演として聞いた方がいいよ、という教誨を受けたことがある。初期の大学院生に旺盛だった中国学全体への意欲が、最近の若い人に欠けてきていることを憂慮された宇都宮先生の苦言であったのだろう。

安田さんは、高校の国語の非常勤講師で授業のある時やその他所用のある日以外、ほとんど研究室に詰めていた。院生

室の指定席にどつかと座り、史料や論文を読んだり、昼食後には囲碁を打ち、勉学に疲れるとよく私を誘って文学部の裏庭でキャッチボールをした。捕手の経験のある私がよくその豪球を受けたのだが、ミットがないので左手の手のひらが真っ赤にはれ上がったようになる。今日の球はよく伸びていましたねと言うと、「なぜ中日ドラゴンズは俺を採りに来ないのだろうか」と例の冗談を言うときの独特の表情を浮かべながらまわりを笑わせることもあったのである。

博士課程時期の安田さんは学生としては最古参であったから、研究室の院生・学部生はすべて後輩になる。特に学部学生はそれぞれの目的をもって安田さんの所へ相談に行く。明日の講読の読み方のわからないところとか、論文の理解したい箇所の解説や出典の調べ方などなど。しかしアプローチの仕方などヒントをくれるだけだったとか。身の上相談で安田さんを煩わせた後輩もいたかもしれない。私には逆に安田さんから仕事を言いつかつた覚えがある。『礼記』の中にあるはずの、どういう語だったかもう忘れたが、その語を探せ、というご下命。後で知ったことだが、宇都宮先生が大学院授業で『周礼正義』を講読していたときの安田さん自身の担当部分の一問題であったようである。おかげで私は帰宅の

パスの中でも漢籍国字解本をめくりつづけ、『礼記』なる書物にはどんなことが書かれているか、学部三年生の段階でおぼろげながらわかったような気になったのである。おそらくはブラブラしている東に少し勉強させてやろうという親心からのものであったろう。そういえば安田さんが中心となって『周礼正義職目表並びに職目索引』を作成したことがある。宇都宮先生の授業では萬有文庫の二十四分冊のをテキストにしたからで、或る職官名が何巻の何分冊の何頁に記載されているかが五十音で引けるようになっていて便利である。ガリ版刷りのを私も一部いただいたが、後々これは役に立った。

『周礼正義』の演習には学部生である私は参加できず、安田さんがどのようにその演習に臨んでいたか知るよしもなかったが、私が修士課程に進学して初めて宇都宮先生の演習に参加し得たときのことをここに少し紹介しておきたい。その演習では宇都宮先生が後に翻訳して出版することになった『顔氏家訓』が講読の対象であった。授業では、東洋史の院生以外に、谷川助教授、丹羽助手はじめ、中国哲学の院生中国文学の院生の方々も出席されていた。新年度最初の報告は、安田さんから指名された私が担当したのだが、ある段の読み方で、宇都宮先生から読解の誤りを厳しく指摘された。

そのとき安田さんは、私の読解にも一理があるとして、宇都宮先生の解釈に疑問を投げかけたのである。お二人の激論に周囲の出席者は一同黙然、しばらく議論がつづいた。院生の反論を却下せずに受け入れ、対等にそれを論じ合う宇都宮教授の潔さですがすがしさが、そして師に対しても臆せず堂々と自説を開陳している勇氣ある院生、どちらも偉いなあーという思いだった。「真理を探究しているガキ」そのものだったのである。大学の授業というのはこういうモノなのだ、という感激が私の胸を覆ったのである。

最後に、安田さんの大学院時代の事柄で忘れてはならないのが、「中国中世史研究会」への参加であろう。名古屋大学の宇都宮、谷川の両先生、京都大学の川勝義雄先生、を中心に、両大学の漢・六朝時代専攻の助手と院生が集まり、京都と名古屋、あるいは遊行の地で月に一回程度開催された。特に川勝先生や吉川忠夫先生の知遇を得たことが、その後の研究生生活をより豊かにする機縁となったと思われる。

安田さんの人柄

安田さんの終生変わらなかつたホビーが囲碁である。囲碁

を打つようになったのは、私の知る限り、当時東洋史研究室へ中国の書籍を入れていた采華書林の森脇英夫さんから手ほどきを受けたのがきっかけであったようだ。院生室でお昼休みによく二人で碁を打っていた。そのうち私が相手をさせられるようになり、「東君、爛柯という言葉を知ってるかね」などと無知な私にいろいろなことを教えてくれた。私もそのうち夢中になって時間の経つのも忘れるようになった。谷川先生や森正夫さんが院生室に入ってくると、やや気まずい思いをすることもあったが、そこで打ちかけることはできず、生返事をして叱られたこともある。安田さんは名古屋から高知そして仙台へ、私は松山から津へそれぞれ配置換えになったが、高知や仙台へよく遊びに行つたし、安田さんも松山に来てくれたりして、そういう時は必ず飲みながら何局も教えるを請うたものである。

安田さんはまた、絵画にも造詣が深かった。ご自分では描くことはなかったと思うが、個展などを覗いては、気に入った絵があると購入していたらしい。高知や仙台のお宅でいくつか、これはどこどこで買ったもので、などと説明を受けたことがある。なんでも、安田さんの生家はそのあたりでは大安田と呼ばれる地主であったそうで、幼いころ家には書画骨

董の類がたくさんあったのだが、戦後の農地改革でそれらを手放す必要があり、子供心にも深い悲しみを感じざるを得なかったと聞いたことがある。だから幼少時になんとなく眺めていた書画等への眼も、後年の美術に関する教養の深まりと共に、次第に備わっていったのだろう。個々の細部を正確に捉え、人や物や自然の相関・配置の関係をうまく表現する技において画家は卓越し、そしてそれらによってある世界を明示的・暗示的に表象しようとしたわけだが、歴史叙述の場合も同様ではなからうか。

安田さんは一局を囲み、絵画を鑑賞しながら、そうした囲碁による大局観、絵画鑑賞から得られる世界の表現方法について思いを深め、後半年の研究生活において徐々に安田ワールドを完成させていったように、私には感じられる。

安田さんの特技として記憶すべきは、博物学というか、動植物や自然物の名前とその生態などをとても精しく知っていたことである。『周礼』などに出てくる「名物」の学に秀でていた。特に植物についてはまことにその知識には深いものがあった。古い時代に生きていれば、本草学の大家としてもあったかもしれない。このことは私以外の多くの方々も承知していることである。魚の名前さえ知らない私に、「君の家

は漁業が家業でしよう」とよくからかいながら教えてくれたものである。そしてその蘊蓄が、特にお酒の好きな安田さんにとって、日常の食生活に大いに發揮されたのである。安田さんの中にある生きとし生けるものへの旺盛な愛情、そういう心の特質が自然の恵みと一体化して生きるという生活の方法によって裏打ちされているのを見るにつけ、私などはいっもうらやましく思っていたのである。

うらやましいと言えはもう一点。私が安田さんの側に居て常々嫉妬していたことは、先生方に対しては安田さんはこちらよつとしたからかいと受け取られるような冗談を時々言ったのだが、それを向けられた先生方はいつも、キツとなったり、しかめっ面をするのではなく、むしろ安田さんの発言の面白味を引き出すようにフォローされていたことである。私も同じように試みたが、不快感を醸成してしまうのが落ちであった。それは要するにユーモアに関するセンスの違いが顕著で、ユーモアの根底にある人間に対する思いやりの濃淡を、冗談を向けられた相手が敏感にキャッチしてしまうからなのであろう。

安田さんは教師や友人だろうが知り合いだろうが、まじや見知らぬ人だろうが、人に対してはいつも実に親切で誠実

に向き合った。諧謔好きではあったが、それは相手をイライラさせるような種類の冗談やからかいではなく、真のユーモア精神にあふれたものであったことは、私だけの独り合点ではなく、先生方の安田さんの諧謔への対応からも見て取れるわけである。このような人柄である以上、現今の新聞・テレビなどで問題になるパワハラなどというものとは絶えて関わりのない態度を取っておられた。そもそも安田さんにとつて「暴力」や「権力」などの「力」とか「パワー」などに対する志向性は全くなかった。むしろ逆に、そうした不当な上からの圧迫とか、力を誇示するような振る舞いに対しては、さまざまい勢いで怒りを発出したし、そして言葉でそれを論難する人であった。

安田さんの思想的な立場というか、信条についても触れておきたい。大学院博士課程の時期、ご自分で、やや自嘲的に「自民党青年部長」と自称していたのだが、自分は保守的な人間なのだと言いつらしていたふしがある。それは七〇年安保に向けて全共闘運動などの諸派の活動が盛んになっていった当時の大学の風潮に対する安田さんの批判であったのではないか、とある時期から私は思うようになった。その批判の核心は、政治主義に陥らず、それぞれの場に生きてい

る人間やその精神を大切にしたいのではなかったか。このような発想は、六朝政治史にそのエネルギーを傾注し始めて以降も変わらなかったはずである。それが安田六朝政治史を理解する一つのヒントになるように思う。

私は今日までひそかに安田さんを「人文主義者」と目してきた。ルネサンスに始まるヒューマニズム信奉者の謂であるが、安田さんは、文学作品などを通じてフランスのユマニストたちにシンパシーを感じていたように思う。それはまた安田さんのユーモア精神に深く関係している。ルネサンス期最大のフマニストたるエラスムスの精神を受け継ぐホイジンガの『ホモ・ルーデンス』や『中世の秋』を私が知ったのも、安田さんのご指示による。古典主義的で、普遍的人間性の調和的發展や解放を、また人道主義をも意味する人文主義は、もちろん暴力的なるものに対してはノンという立場である。私は安田さんのヒューマニストとしての思想的萌芽は、実はトルストイを愛した宇都宮先生のヒューマニズムに触発されたのではないか、と思っている。

宇都宮史学との邂逅

生前、安田さんは、宇都宮史学について関係者で討論する企画を有していた。二〇一五年ころだったか、私にも相談があった。私自身はそのとき天津で日本語を教えていて、歴史学について考えるゆとりがほとんどなかった。『創文』四〇七号（一九九九年）に宇都宮先生を偲ぶ一文を書いたけれど、先生の業績内容や方法的な特異性などを通り一遍になぞったにすぎず、その後は学内行政の仕事や海外勤務にかまけて、宇都宮史学の意義をもっと明らかにしなければならぬという問題意識に欠けていた。二〇一六年七月の私の本帰国を待って、安田さんから再度の参加要請があった。私がそれをやり抜く自信を持ってずに回答をあいまいにしている間に、安田さんはいろいろと他の関係者にも当たって企画の現に意欲を燃やしたらしいのだが、結局、それは実現しないまま永遠にその機会を失ってしまった。安田さんは悔しい気持ちを持って逝かれたのではないだろうか。

安田さんが亡くなってから、再度の呼びかけにも応えられなかったという負い目もあり、宇都宮史学の検討の意義など

を考えていると、安田さんがあれば熱心になっていた理由が少しわかるような気がしてきている。宇都宮史学の顕彰という意図はもちろんあるが、それだけではなく、宇都宮先生の歴史理解の方法と安田さんのそれとの近縁性を安田さん自身がつよく意識し、みずからの歴史理解の、宇都宮史学との類似と相違の二面を把握したいという衝動がその晩年になってふつふつとわき上がったからではないのか、というのが私の勝手な推測である。

安田さんは「八王の乱をめぐる――人間学的考察の試み」（本誌第四号、一九七六年）の末尾で、宇都宮史学の特徴を「人間学としての東洋史学」と捉え、「さればこそ氏の過去の人々に対する姿勢も、歴史研究のための単なる素材としてのそれではなく深い共感の意識を基調とする。抑々が現代人たる氏にとって東洋の歴史的世界の人々との間には『たち切り得ない生命のつながり』によって内面的に密接し繋合するものであったのである。私が氏から最も大きな感銘をもつて教えられたことの一つは、東洋史学を人間学たらしめんとする志向であり、そしてそのための方法、すなわち歴史の人々に対する共感の姿勢、換言すれば内面的理解の姿勢である。」とそれを敷衍している。

名大での修士論文を元にした「『晋安王子勳の叛乱』について」（一九六七年）から「西晋武帝好色攷」（一九九八年）に至る数多くの論考にはすべて、安田さん一流の中国古代中国社会へのまなざし、「歴史の人々に対する共感の姿勢」が貫かれている。中でも、一九八一年の「王僧虔『誠子書』考」には、宇都宮先生独特の手法と類似した方法が採用されていることに多くの人が気づくはずである。宇都宮先生の場合は、時代の性格を端的に示す著述や作品、『論語』とか『顔氏家訓』、『僮約』などが取り上げられ、それらを徹底的に分析し尽くしながら当該時代の歴史像を追究していく。安田さんのこの論文では書簡が取り上げられ、難解を以て鳴るそれを全訳して示し、そこから一流名族層の将来への志向性を導き出そうとする。おそらくは師の分析手法を念頭に置いていただろう。

一方、一九八五年の「南朝貴族制社会の変革と道德・倫理」は、宇都宮先生の方法とはやや異なり、著述や作品という文字によって表された世界から歴史像を構築するのではなく、楮淵と袁粲という名族の二人の対蹠的な行動とそれに対する同時代人の評価を分析することによって、その時代性を明らかにしようという方法を探っていることである。宇都宮

先生の顔之推のタクティクス論からヒントを得ているであろうが、ある政治的な状況に人間の行動を絡ませながら分析し、その時代性や変化を探っていく方法で、安田さん特有の色が少しつき始めているように感ぜられる。この方法は最晩年の「西晋武帝好色攷」にも適用されているように思う。ここに宇都宮先生のと少し異なる安田さんの方法を見いだすことも可能である。

安田さんは、名古屋大の東洋史研究室で宇都宮先生にめぐり会い、その学問から大いに学び、それを少しづつ自己のものとして鍛え上げながら歩み続け、ついには独自の歴史学を樹立したのである。

(ひがし しんじ 三重大学名誉教授)

